

妻、栄子

福岡県 宮 木 勝 弘

昭和十年三月友人のすすめで渡満し、昭和十三年八月、同僚夫婦の媒酌により、亡妻栄子と結婚、私当時蒙古軍総指令部軍事教官として勤務しており司令官は季守信と申し上げる閣下でありました。栄子との楽しい新婚生活が続いたのも束の間、慣れぬ異郷の生活の疲労が重なり病床に伏してしまつた。月日は流れ二年後私は句頭勤務となりました。句頭の街は東に大黄河の黄水が流れ其の河幅はただただ驚くばかり。冬は凍結しその上を馬車駝駝、また砲車も通り人は馬に乗り氷上を往来するのでした。北方外蒙古から吹く風はゴビ砂漠の黄塵すだく、市内は砂山の如くなり、足は腰まで埋まるようでした。日本人の少ない句頭で私の出張時は妻の栄子には短銃を常に身につけさせている生活でした。百靈廠に勤務となり総指令部防衛第三司団顧問主任教官となり益々任務は重大となりつつある頃突然昭和二十年八月六日ソ連

参戦の報せに、急遽妻を伴い厚和駅にて終戦の詔勅に涙し、土に座して泣き伏した。我々は厚和駅より列車にて出発列車の中で厚和病院の女医より全員に青酸カリの包が渡されたが命令のあるまでは口にすることをかたく禁じられた。突然敵機飛来し車の最先端に乗っていた兵隊が応戦見事に打落す。ちょうどそのとき列車が止まつたとたん一人の男性が発狂、列車から飛び下り逃げだしてしまふ。また同乗の補導官も手許が狂つたものか短銃を暴発させてしまい向い側に座っていた主婦の腹部を貫通する悲惨事を起こしてしまつた。次の平地泉駅に出发した後、汽車は長河口に到着しましたがなぜか我々の汽車は日本軍に取られ無蓋車に移される途中駅のホームに山積みの毛布を見つけ大喜びで、藁敷の無蓋車に敷き幾夜か過ごす中、雨が降り、日が照りいつか大きなうじ虫がうようよと湧くようになったのにも馴れ、女性達は手摺みで取っては捨てるほどになつてしまつた。用便は毛布でまわりをかこみ空缶に用を足した。みじめで妻が可哀相でならなかつた。中国機関士は金を要求し出さねば何時間も汽車を動かさぬ日々が続いたがどうか天津まで着

くことが出来ホットする天津では集団生活をする事となり、武徳殿にはいる。大きなプールがありその中に冬期保存食として色々の食物が山積されており皆飛び上ぐらんばかり喜んだのも束の間、米軍が民間の中国人に分けあたえてしまった。数日して日本軍兵器廠に移り十二月十一日米軍上陸用舟艇にて天津より乗船、船内で米兵より女性を十人要求され一同がく然としているとき水商売の女性の方達が「私達が行きます」との申し出があったときに皆泣いて手をあわせたのが忘れられません。船中無事に故郷福岡町につきましたが、昭和二十一年十二月四日医者が無責任から妻は不帰の人となり早や四十数年が立ってしまいました。

満州の思い出

沖繩県 兼城 千代

私は時折り考える。戦争とは何であったか、誰のため、なんのため、若かりし時代を振りかえり、時々思い起こ

すことがある。一老人ながら、ときは十八年五月花の十九歳、軍人姿の主人に手をひかれ大陸に渡った。たどり着いたのが、満州開拓地、現地へ行って農業をするのでなく主人は兵事主任、若い団員に軍事訓練の担当者。軍服姿に日本刀、他の団員から羨まれていた。が、時勢は変わりこの生活も二年半で終わった。

主人は二十年の六月頃、二度目の召集を受け、親子三人を異国の地に残して出て行った。頼りの大黒柱がいない。秋風は去り極寒が押し寄せる大陸の冬を迎えた。男全員が戦地に行った。あとは婦人と子供ばかり、その姿はこの世の不自然さが日を増してゆくばかり、そのうちに予想していたとおり、現住民の男が出没始めた。皆と連絡をとり合い昼夜集団で行動する。服装も男姿、黒髪は切り落とし顔にスミを塗り、身を守る生活は苦難の中の苦難でした。配給物資の受け取り、伊漢通港から穀物の運搬は体力の限界だった。特に心配は薪取り作業、極寒の中で山へ行く四、五人組んで枯枝を探し束ねて、めいめいが肩にかつぎ、グループで帰って来る。これが日課であった。ある日のこと、いつものように午後四時